



アヤット(左)
アトファルナろう学校にて

アヤットの挑戦

アトファルナろう学校から 外の社会へ

アトファルナろう学校にはカフェテリアがあり、サンドイッチや飲み物を職員に提供していますが、その責任者として働いてきたアヤットさん(28歳)が最近、ガザ市内にあるカットンセンターという図書館のカフェテリアのマネージャーも兼任するようになりました。このカフェテリアはアトファルナが運営を委託されており、ろう者のスタッフが軽食やお菓子を提供しています。カットンセンターの利用者の多くは「聞こえる人」であり、手話が通じるアトファルナとは大きく違います。

マネージャーの仕事

カットンセンターもカフェテリアのスタッフはみな「ろう者」です。私は責任者として、フルーツジュースやロシア風サラダなど新しいメニューを考えるだけでなく、盛り付けや材料の見わけ方などについてスタッフを指導しています。毎日3から5時間、二人の女性スタッフと仕事をし

ています。現在三人目を入れようと検討中です。カットンセンター側は聞こえる人を一人入れようと提案してきましたが、私は断りました。

「彼女とコミュニケーションをとる術がないですよ。」「どんな風に話しかければよいのだろう」。最初、カフェテリアに来る人たちは戸惑っていました。でも、私は聞こえる人たちにろう者やそのコミュニティとど

う接していけばよいか知ってほしいと思っています。ろう者は社会の一部で、無視することはできないと。

スタッフにも怖がったり、無視されていると感じたりしてほしくありません。むしろ自分たちはできるんだ、聞こえる人と一緒に働くんだと感じてほしい。聞こえる人とどう接すればよいか見つけてほしい。

私自身は難聴なので少しは音声で話すことができますが、仕事では手話を使います。「手話しか使わないけれど、聞こえる人とコミュニケーションができるわよ」と言いたいからです。お客さんはまったく手話を知らないかもしれませんが、彼女たちは「これがほしい」という手話を教えてくれますよ。

子どもたちの間では「聞こえない人がレストランで働いているよ。見に行こう。何か買ってみようよ」と話題になっています。メニューの中にチーズサンドを見つけて、ほしいものを指します。するとスタッフは子どもたちにチーズという手話を教えます。次からは子どもたちは手話で注文しますよ。スタッフも今では「私たちは大丈夫。みんなとコミュニ

ケーションできるし、自分たちのやり方がわかったから」と言っています。今日は、私がカッタンセンターには行かないで、彼女たちだけでどうやりくりするか試しているところです。

衛生面の管理には特に気を付けています。またテーブル、椅子、ナプキンのセットの仕方などは、アトファルナのガイドラインを適用しました。カッタンセンターでは衛生面があまり重要視されていないようだったので、私が改善しました。

私のこと

生まれたとき聴力がありません。4歳半ぐらいの時に、砂遊びをしている最中、木材を運ぶ荷馬車がそばに来て、馬に顔を蹴られ、木材がおなかに落ちました。4日間、口も開かず、しゃべれず、聞こえず、目も開けられませんでした。舌が切れていました。最近「手術をすれば90%の聴力は元に戻って、補聴器も外せる」と言われましたが、補聴器のあるろう者としての生活になれているので、今更リスクを冒す気持ちはありません。

4年生までは通常の学校に行っていました。教室ではいつも前の席に座らせてもらって、表情や唇の動きが見える位置にいました。でも後ろの席になってしまうこともあって、もう学校にいたくない、家にいたいと思いました。そしてアトファルナろう学校のことを聞いたのです。

初めてアトファルナに来たとき、最初はみんなが手で話をしているのが怖かったです。ジェリー校長（当時）が優しく手を引いて学校の中を連れて回り、私と同じような難聴の子どもたちを紹介してくれました。最初の日にいくつか手話を覚えました。アート、コンピューターのメンテナンスなど、アトファルナの外でもたくさん研修を受けました。

その後、補助教員になり、1年生、2年生、3年生と受け持っていました。それから図画工作のアシスタントになって、2年前にはアシスタントから教師に昇進して、4年生、5年生、6年生を教えるようになりました。

レストラン開店に向けて

「私はろう者で、難聴の女性。でも、プロフェッショナルとしての生活をしているんです」ということを聞こえる人たちだけでなく、私の仲間のろう者たちにも証明したいのです。「あなたは人生の中で何かを成し遂げられるし、自分の道を見つけ、コミュニティの中で自分の居場所を見つけることができるんだ」と仲間を励ましたい。

学校を卒業しても家でじっとしているしかないろう者たちをたくさん知っています。そうした人たちに「大丈夫だよ、働けるよ」と背中を押し



13才の頃

カッタンセンター

●子ども

手話覚えたよ。(手話で) ジュース、2シエケル。うん、手話って面白いよ。

●ホダさん(カフェテリアスタッフ)
アヤットさんはよく教えてくれます。最初は大変だったけれど、今は大丈夫ですよ。

●ラナさん(カッタンセンター職員)
アヤットさんがマネージャーになって変わったことがいくつかあります。メニューが増えたこと、カフェテリアが清潔になったこと、ケーキやサラダの種類が増えたことですね。

てあげたい。時々テレビで料理番組を見ます。パレスチナの地方局にこうしたアイデアを持ち込んで、ろう者のための料理番組ができたと思います。

今年のうちに、ガザ市にスタッフが全員ろう者のレストランをオープンする計画があります。そこは私にとってもろう者の仲間にとっても大事な場所になるでしょう。私はろう者と接することへの「恐れ」という壁を壊したいと思っています。ろう者と聞こえる人が一緒に暮らすために一生懸命働きたいと思っています。また多くの人が「耳が聞こえない人は働けない」と誤解しているので、社会のみんなに「私たちはできる、時に聞こえる人よりもできるんだ」と知ってほしいのです。もうじき「ろう者たちが自分たちでレストランを作ったよ、運営しているんだ」と話題になりますよ。

周囲の声

アトファルナろう学校 ナイーム校長

アヤットはろう者の中で最も意欲的な一人です。彼女は成功モデルだと思います。私は一緒になって創造的に仕事をしてくれる人を求めています。最初に料理ができると聞いたときは驚きましたが、アートも料理も同じだということを知って彼女が教えてくれました。レストランでは10人余りのろう者が働く予定です。8月ごろの開店を目指しています。



カッタンセンターにて